

第1表. 栄養価自給率表

自給別 購入	区分	作物および種類	目的収量	収量および 購入数量	T. D. N	D. C. P	比 率
自	畑 (飼料圃) 作	馬鈴薯	kg 1,500	kg 1,438	kg 327.8	kg 23.0	%
		鈴薯	3,750	3,750	} 303.1	34.7	
		飼料かぶ(青刈り玉蜀黍跡)	1,875	1,219		701.0	
		青刈り玉蜀黍(サイレーシ用)	5,000	5,007	1,451.3	113.3	
		ラディノクローバー	8,000	8,025	341.7	70.2	
		混播	3,360	1,890	142.1	25.8	
		牧草	1,800	1,125	69.3	3.0	
		コモンベッチ	500	495	25.5	6.0	
		燕麦混播	380	300			
		青刈り玉蜀黍(青刈り用)					
青刈りなたね							
給	水田裏作	実取り大麦	—	* (204)	(144.5)	(18.0)	
		刈り飼料作物	4,500	4,500	612.0	96.8	
	その他	稲わら	—	720	267.1	7.2	
		稲草	6,000	5,800	527.8	92.8	
	計	青草換算		36,629	4,768.7	502.8	T. D. N 80.9 D. C. P 63.2
購入	濃厚飼料	大豆粕料		1,098	699.4	138.3	
	大配合飼料			333	260.7	119.5	
				158	102.7	24.5	
		小計			1,589	1,062.8	282.3
粗飼料	野乾草		675	61.4	10.8		
	計	青草換算	2,700	1,124.2	293.1	T. D. N 19.1 D. C. P 36.8	
合計				39,329	5,892.7	795.9	

飼養乳牛 2頭

必要粗飼料 : 日量1頭当り50kgとして1年間必要量 36,500kg

$$\frac{\text{生産量}}{\text{必要量}} = \frac{36,629}{36,500} = 1.003 \dots \dots (1)$$

$$\frac{\text{生産量} + \text{躍入量}}{\text{必要量}} = \frac{39,329}{36,500} = 1.078 \dots \dots (2)$$

* () : 大麦は年度内に給与しなかった。

水田酪農に関する実験的研究

第2報. 労働配分と労働報酬

永沼昌雄・佐藤徳幸

(青森県農試)

第1報で、津軽地帯の自給飼料生産に関する作付方式についての報告を行ったが、ここでは第1報の作付方式に従って農業経営を行った場合の年間労働配分と家族労働報酬について報告する。

ここで想定した農家の経営規模は第1表に示すとおり

である。

1. 労働配分

水田地帯の性格として、労働のピークはほとんどの場合稲作部門の作業経過と一致して現われている。従って

傭的労働は田植・除草・稲刈り・脱穀調整の時期に集中的に必要となり、労働のピークを形成している（第1図参照）。これを部門別にみると、稲作部門には自家労働の45.8%・雇傭労働の82.1%が投入されているのに対し、乳牛部門では稲作部門と同程度の自家労働(42.3%)を必要とするが雇傭労働は少い(5.9%)。

第1表. 経営規模の概要

1. 土地

2. 建物

種目	摘 要	数量	種 目	摘 要	数量
水田	本 場	40.0	畜 舎	平屋トタン 28.0 m^2	1
"	浄充寺	53.7	サイロ	2.0×3.0	2
畑	本 場	29.5	庁 舎	平屋トタン 26.0 m^2	1
敷地		3.0	作業場	30 m^2	1

3. 大農具

マメトラ ササキ式本機その他附属機一式
トレラー マメトラ用1台
エンシレージカッター 北農式超小型鋤鎌兼用機1台
ルートカッター 北農式1台
脱穀機 動力用縄上式1台

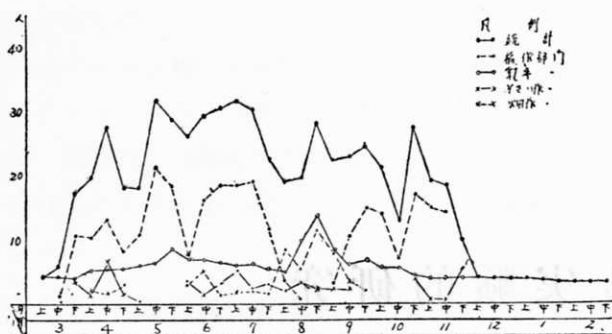
4. 乳 牛

ホルスタイン種 搾乳牛 1頭
" 育成牛 1頭

5. 小農具1式

6. 稼働労力

男 2名 女 1名



第1図. 自家労力の部門別配分状況

労働の競合が端的に現われるのは、5月中～下旬の田穂作業と乳牛部門のサンマーサイレージの詰込み作業の時期である。すなわち、青刈ライ麦の刈取り・運搬・詰

込み・水田の耕起～田植までの一連の作業が半月間の期間に集中して続くためである。一方、青森県の場合は田根の遅れが収量に与える影響が少なくないのと、サンマーサイレージの詰込みの時期が製品の品質に影響するところが大きいので、この時期には各部門間の労働配分には細心の注意が必要とされる。

2. 労働報酬

次に部門別の1日当りの家族労働報酬を比較すると第2表に示したとおりで、稲作が748円、そさいが44.3円、乳牛部門では市乳仕向け（乳脂率無換算1,875 kg当り55円）のときで296円、原料乳仕向けの場合では217円となり、稲作の有利性を如実に物語っている。

第2表. 農業経営成果表

	稲 作	そさい	乳牛 *1	計 *1
	円	円	円	円
A. 粗 収 益	357,030	34,550	212,300 190,332	603,880 581,912
B. 経 営 費	129,347	7,272	119,284	255,903
C. 純 収 益 (A-B)	227,683	27,278	93,016 71,048	347,977 326,009
D. 家族労働報酬	215,860	26,864	82,147 60,179	324,871 302,903
E. 家族労働日数	288.4 日	60.6 日	277.4 日	626.4 日
F. 1日当り家族 労働報酬(D/E)	748 円	443 円	296 217	519 484

注：※1 上段は牛乳を市乳仕向けしたとき。
下段は牛乳を原料乳仕向けしたとき。

3. 考 察

津軽地帯における水田酪農には数々の問題（飼料の自給性・労働配分・乳価など）があり、実験の結果では乳牛部門が有利とはいえないが、労働の繁忙の度が他の部門のように大きく、また冬期の半遊休労働力の有効効果が認められた。現在、農機具普及に伴って役畜が減少した反面、用畜の増加が家畜単位数としてそれに追いつかない現状から、地力の維持増進ひいては生産力の増強・総合所得の増大の面等から、同地帯の酪農の意義が大きくなるものと思われる。